

第 56 期

事 業 報 告 書

〔 2021年4月 1日から
2022年3月31日まで 〕

日本地震再保険株式会社

目 次

株主の皆様へ	1 頁
事業の概況	2 頁
貸借対照表	5 頁
損益計算書	9 頁
株主資本等変動計算書	11 頁
会社の概要	12 頁
役員	12 頁

株主の皆様へ

株主の皆様には、当社業務につきまして、平素格別のご支援を賜り厚く御礼を申し上げます。

本日の定時株主総会におきまして、第 56 期の決算の内容についてご報告させていただきましたので、ここに第 56 期事業報告書をお届けいたします。

当社は、国内の家計地震保険を一手に引き受ける再保険会社として、これまで 1995 年の阪神・淡路大震災、2011 年の東日本大震災、2016 年の熊本地震、さらには 2021 年および 2022 年と続いた東北地方で発生した地震等の地震災害に対し、当社の最大の使命である再保険金の迅速・確実な支払いに努めてまいりました。

また一方で、再保険金支払いのための資産の管理・運用につきましては、流動性と安全性を第一としつつ、収益性にも配慮してまいりました。

2021 年度から第 6 次中期経営計画をスタートさせました。今後の環境変化を見据えて中長期ビジョン『地震特化の強みを磨き、安心提供の Next stage へ』を策定し、その実現に向け取り組んでいます。

私たちは、これからも社会的責任と使命を十分認識し、地震再保険事業を通じて「地震保険制度の発展」や「安心で安全な社会の実現」に貢献することで、ステークホルダーの皆様からより一層信頼される会社を目指してまいります。

株主の皆様におかれましては、変わらぬご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

2022 年 6 月 30 日

代表取締役社長 伊 東 正 仁

事業の概況 〔 2021年4月 1日から 2022年3月31日まで 〕

(1) 事業の経過及び成果等

2021年度のがわが国経済は、新型コロナウイルスの感染拡大によって緊急事態宣言等が断続的に発出される中で低迷していましたが、2021年9月末の全面解除に伴い経済社会活動が徐々に回復し、景気は緩慢ながらも持ち直しの動きが見られました。これにより、2021年10月～12月期のGDPがプラス成長に転じたものの、年明け以降のオミクロン株の感染拡大に伴うまん延防止等重点措置の広がりとともに、消費は再び落ち込みを見せました。加えて、原燃料価格の上昇や円安の進行、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻による政情不安等により、景気回復は抑制されると見られます。

このような情勢の中、地震保険の収入保険料は前年度比0.3%増の横ばいとなりました。一方で2020年度から開始された再保険料配分の特例措置により、正味収入保険料は増加しました。正味支払保険金及び損害調査費については、2021年2月に発生した福島県沖を震源とする地震の支払いにより大幅に増加しました。なお、2022年3月に発生した福島県沖を震源とする地震については、当年度の支払いがなかったものの、支払備金を計上しました。

資産運用に関しては、流動性・安全性を最優先に取組み、超低金利環境が続く厳しい運用状況の中で、運用資産の増加や為替評価損益の改善等により運用益は前年度を上回りました。

2021年度より第6次中期経営計画がスタートし、「経営基盤の高度化」と「SDGsの取り組み」をベースに「人財戦略」及び「DX化」を進めながら、「地震保険制度の進化」、「運用規模1兆円を視野に入れた資産運用体制の構築」、「複合災害発生時の支払体制の強化」及び「付帯率の向上及び防災・減災の推進」に注力しています。地震保険制度については、民間の危険準備金1兆円到達後の再保険制度のあり方を業界内で議論し、資産運用では運用計画の多様化を検討しました。また、BCPでは考え方をシナリオベース型からオールハザード型に転換し具体策を策定しました。付帯率向上及び防災・減災推進ではデータ分析に着手するとともに、関係先へのセミナー実施により地震保険の理解促進や普及拡大に努めました。

イ. 地震保険成績の概要

(イ) 正味収入保険料と正味支払保険金

収入保険料から出再保険料を控除した正味収入保険料は2,524億円(前年度比8.4%増)となりました。一方、正味支払保険金は1,500億円(前年度比1,373.2%増)となりました。

(ロ) 危険準備金と責任準備金

正味収入保険料から受再保険手数料等を控除した正味保有保険料1,803億円と税引運用益4億円の合計1,807億円を危険準備金に積み増しました。

また、正味支払保険金、損害調査費、支払備金及び広告宣伝費の合計1,894億円を過年度危険準備金から取り崩した結果、当年度末危険準備金は2,311億円(前年度比3.6%減)となりました。

この危険準備金に未経過保険料積立金を加えた当年度末責任準備金は5,206億円(前年度比1.4%増)となりました。

(ハ) 元受保険会社等の危険準備金

受託金勘定の元受保険会社等の危険準備金については、差引正味保険料及び運用益の合計11億円を積み増し、広告宣伝費16億円を過年度危険準備金から取り崩した結果、当年度末危険準備金は205億円(前年度比2.4%減)となりました。

ロ. 資産運用の概要

資産運用にあたっては、当社の資産運用方針に基づき、流動性と安全性を第一義とし、これに収益性を加味して進めて参りました。

当年度末の総資産は、正味収入保険料が増加したものの、2021年2月に発生した福島県沖を震源とする地震に対する保険金等の支払いにより、6,890億円（前年度比3.3%増）となりました。なお、主な運用資産の項目は、預貯金が1,936億円、有価証券が4,577億円となっています。

損益面に関しては、厳しい運用環境が継続する中、利息及び配当金収入が5億円、為替差益が17億円、これらに有価証券売却益等を加えた資産運用収益は20億円となりました。一方、ヘッジの為替予約に関する金融派生商品費用が14億円となり、有価証券売却損等を加えた資産運用費用は16億円となりました。

なお、当社では外貨建債券の購入にあたって、ほぼ100%の為替ヘッジを行っています。

ハ. 当年度損益（資本勘定）

当年度の損益については、利息及び配当金収入にその他の項目を加減算し、法人税及び住民税を控除した結果、1百万円の当期純利益となりました。

今後も地震災害等が予想され、ますます国民の地震保険への期待・関心が高まる中、当社が果たす役割と責任はより一層重くなるものと考えております。

これからも中長期ビジョンとして掲げた「地震特化の強みを磨き、安心提供のNext stageへ」を第6次中期経営計画の着実な推進を通じて実現することで「地震保険制度の発展」や「安心で安全な社会の実現」に貢献し、ステークホルダーの皆様からより一層信頼される会社を目指して参ります。

株主の皆様におかれましては、一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(注) 本報告書（以下の諸表を含む）における各計数の表示及び計算は次のとおりであります。

保険料等の金額及び株数は記載単位未満を切り捨てて表示し、増減率等の比率は小数点第2位を四捨五入し小数点第1位まで表示しております。

(2) 財産及び損益の状況の推移

イ. 危険準備金等

(イ) 業務勘定

(単位：百万円、%)

区 分	2018年度	増減率	2019年度	増減率	2020年度	増減率	2021年度 (当期)	増減率
正味収入保険料	118,679	22.0	129,298	8.9	232,822	80.1	252,468	8.4
正味保有保険料①	43,313	26.0	43,608	0.7	144,656	231.7	180,303	24.6
税引運用益②	103	△67.6	121	17.6	177	45.8	462	160.1
危険準備金積増額③	43,416	25.2	43,730	0.7	144,834	231.2	180,765	24.8
③=①+②								
危険準備金取崩額④	144,296	1,406.9	23,969	△83.4	127,840	433.3	189,444	48.2
危険準備金⑤	203,074	△33.2	222,835	9.7	239,829	7.6	231,150	△3.6
⑤=前年度⑤+③-④								
未経過保険料積立金⑥	213,625	11.4	243,638	14.0	273,544	12.3	289,515	5.8
責任準備金⑦	416,700	△15.9	466,474	11.9	513,374	10.1	520,665	1.4
⑦=⑤+⑥								
保険引受利益	—	—	—	—	—	—	—	—
正味損害率	113.0		24.4		5.4		64.7	
正味事業費率	45.3		43.3		25.2		22.4	
運用資産	424,869	△14.1	465,644	9.6	621,184	33.4	650,720	4.8

(ロ) 受託金勘定

(単位：百万円、%)

区 分	2018年度	増減率	2019年度	増減率	2020年度	増減率	2021年度 (当期)	増減率
正味保険料	3,073	△1.6	2,107	△31.4	1,707	△19.0	1,093	△36.0
積増控除額	31	△31.9	22	△27.8	19	△14.3	11	△38.0
差引正味保険料①	3,042	△1.2	2,085	△31.5	1,688	△19.0	1,081	△35.9
運用益②	—	△100.0	—	—	—	—	22	—
危険準備金積増額③	3,042	△3.4	2,085	△31.5	1,688	△19.0	1,103	△34.6
③=①+②								
危険準備金取崩額④	20,114	771.3	1,073	△94.7	12,324	1,048.3	1,612	△86.9
全社平均実効税率変更による増減⑤	—	△100.0	△3	—	3	—	—	△100.0
危険準備金⑥	30,669	△35.8	31,677	3.3	21,045	△33.6	20,536	△2.4
⑥=前年度⑥+③-④+⑤								
運用資産	23,750	△36.4	25,035	5.4	26,023	3.9	16,736	△35.7

ロ. 当期損益 (資本勘定)

(単位：百万円、%)

区 分	2018年度	増減率	2019年度	増減率	2020年度	増減率	2021年度 (当期)	増減率
利息及び配当金収入	3	△12.6	3	6.5	3	2.8	3	2.5
当期純利益(又は当期純損失)	1	—	△1	△174.3	0	—	1	351.4
繰越利益剰余金	489	0.3	487	△0.2	488	0.1	489	0.3
運用資産	1,636	16.6	2,003	22.4	2,106	5.2	1,999	△5.1
1株当たり当期純利益 (又は当期純損失)	0円79銭		△0円59銭		0円17銭		0円75銭	

ハ. 運用資産及び総資産

(単位：百万円、%)

区 分	2018年度	増減率	2019年度	増減率	2020年度	増減率	2021年度 (当期)	増減率
運用資産	450,255	△15.6	492,683	9.4	649,315	31.8	669,456	3.1
総資産	468,425	△14.7	510,798	9.0	667,273	30.6	689,022	3.3

(注) 運用資産は、預貯金、コールローン、買入金銭債権、有価証券及び建物の合計額であります。

貸借対照表
(2022年3月31日現在)

(単位:百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資産の部)		(負債の部)	
現金及び預貯金	193,688	保険契約準備金	664,942
預貯金	193,688	支払準備金	144,276
コーポレートバンク	42	責任準備金	520,665
買入金銭債権	17,999	受託金	16,748
有価証券	457,705	その他負債	7,434
国債	25,898	再保険借	5,227
地方債	95,870	未払法人税等	371
社債	303,916	預り金	3
外国証券	32,020	未払金	484
有形固定資産	46	金融派生商品	1,346
建物	20	退職給付引当金	128
その他の有形固定資産	26	役員退職慰労引当金	7
無形固定資産	89	賞与引当金	22
ソフトウェア	87	特別法上の準備金	0
その他の無形固定資産	1	価格変動準備金	0
その他資産	19,449	地震保険評価差額金	△ 1,792
再保険貸	19,090	負債の部 合計	687,492
未収金	5	(純資産の部)	
未収収益	236	資本金	1,000
預託金	45	利益剰余金	547
仮払金	71	利益準備金	1
		その他利益剰余金	546
		特別積立金	17
		価格変動特別積立金	39
		繰越利益剰余金	489
		自己株式	△ 5
		株主資本合計	1,541
		その他有価証券評価差額金	△ 12
		評価・換算差額等合計	△ 12
		純資産の部 合計	1,529
資産の部合計	689,022	負債及び純資産の部合計	689,022

(注)

1 会計方針に関する事項は次のとおりであります。

(1) 有価証券の評価基準、評価方法及び表示方法は次のとおりであります。

- ① その他有価証券の評価は、期末日の市場価格等に基づく時価法により行っております。
- ② 地震保険の責任準備金及び地震保険に係る受託金に対応する資産の評価差額については、税効果控除前の額を、保険業法施行規則別紙様式に基づき、負債の部に「地震保険評価差額金」として表示しております。それ以外の評価差額については、税効果控除後の額を全部純資産直入法により処理し、純資産の部に表示しております。また、売却原価の算定は移動平均法に基づいております。

(2) デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

(3) 有形固定資産の減価償却は、定率法により行っております。ただし、1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については定額法により行っております。

(4) 無形固定資産に計上している自社利用のソフトウェアの減価償却は、見積利用可能期間(5年)に基づく定額法により行っております。

(5) 外貨建の資産の本邦通貨への換算は、外貨建取引等会計処理基準に準拠して行っております。

(6) 貸倒引当金は、債権の貸倒れによる損失に備えるため、資産の自己査定基準及び償却・引当基準に基づき、次のとおり計上しております。

破産、特別清算、手形交換所における取引停止処分等、法的・形式的に経営破綻の事実が発生している債務者に対する債権及び実質的に経営破綻に陥っている債務者に対する債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収が可能と認められる額等を控除し、その残額を引き当てることとしております。上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績等から算出した貸倒実績率を債権額に乗じた額を計上しております。また、全ての債権は資産の自己査定基準に基づき財務部が資産査定を実施し、当該部署から独立した管理・企画部が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の計上を行っております。

なお、当期は引当の対象となる資産がないため、計上を行っておりません。

(7) 退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務の見込額に基づき計上しております。

なお、退職給付債務は、自己都合退職による期末要支給額を基に計算する簡便法により算出しております。

(8) 役員退職慰労引当金は、役員の退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づき当期末要支給額を計上しております。

(9) 賞与引当金は、従業員の賞与に充てるため、当期末における支給見込額を基準に算出しております。

(10) 価格変動準備金は、株式等の価格変動による損失に備えるため、保険業法第115条の規定に基づき計上しております。

(11) 再保険取引は、元受保険会社等と締結している地震保険再保険特約書等及び政府と締結している地震保険超過損害額再保険契約書等の定めに基づいております。地震保険再保険料報告書等が到来した時点で収入保険料を計上しており、元受保険会社等及び政府に対して出再したと認められる保険料を支払再保険料として計上しております。

また、地震保険再保険金計算書が到来した時点で支払保険金を計上しており、元受保険会社等及び政府から回収可能と認められる保険金を回収再保険金として計上しております。

- (12) 支払備金は、元受保険会社から報告を受けた支払備金合計額と元受保険会社から保険金請求を受け付けたものの当社において未決済となっている未払額の合計を支払備金として計上しております。

なお、保険業法施行規則第73条第3項に基づき再保険が付された部分に相当する支払備金は計上を行っておりません。

(会計方針の変更)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、計算書類に与える影響はありません。

2 金融商品の状況に関する事項、金融商品の時価等に関する事項及び金融商品の時価の適切な区分ごとの内訳等に関する事項

(1) 金融商品の状況に関する事項

当社は再保険金の支払いに備え、主に国内外の高格付の短中期債並びに短期金融商品を保有し、流動性と安全性を第一義とし、それに収益性を加味した資産運用を行っております。デリバティブ取引は、外貨建債券の為替変動に伴う市場リスク軽減のための先物為替予約で、実需の範囲内で行うこととしております。また、市場リスク・信用リスク・流動性リスクについては定期的に時価や信用情報を把握、管理しております。

(2) 金融商品の時価等に関する事項及び金融商品の時価の適切な区分ごとの内訳等に関する事項

2022年3月31日における貸借対照表計上額、時価の区分については次のとおりであります。なお、現金及び預貯金、コールローン、買入金銭債権は短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、注記を省略しております。

金融商品の時価は、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：同一の資産又は負債の活発な市場における(無調整の)相場価格により算定した時価

レベル2の時価：レベル1のインプット以外の直接又は間接的に観察可能なインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：重要な観察できないインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

時価をもって貸借対照表計上額とする金融商品 (単位：百万円)

区分	貸借対照表計上額			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
有価証券				
その他有価証券	—	457,705	—	457,705
国債	—	25,898	—	25,898
地方債	—	95,870	—	95,870
社債	—	303,916	—	303,916
外国証券	—	32,020	—	32,020
デリバティブ取引(※)				
ヘッジ会計が適用されていないもの	—	(1,346)	—	(1,346)
通貨関連取引	—	(1,346)	—	(1,346)

(※)その他資産及びその他負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については()で表示しております。

(注1)時価の算定方法に用いた評価技法及びインプットの説明

有価証券

有価証券については、日本証券業協会の売買参考統計値及び外部ベンダーから提供された価格によっておりますが、市場の活発性に基づきレベル2の時価に分類しております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引は店頭取引であり、公表された相場価格が存在しないため、取引の種類や満期までの期間に応じて割引現在価値の評価技法を利用して時価を算定しております。評価技法で用いている主なインプットは、金利及び為替レートであります。観察できないインプットを用いていない又はその影響が重要でない場合はレベル2の時価に分類しております。

- 3 消費税等の会計処理は税込方式によっております。
- 4 責任準備金の内訳項目である危険準備金は、責任準備金の算出方法書に基づき、正味純保険料の額と資産の運用によって生じた利益から法人税等相当額を除いた額を累積して積み立てております。
- 5 有形固定資産の減価償却累計額は184百万円、圧縮記帳額は2百万円であります。
- 6 支払備金の内訳は次のとおりであります。

支払備金(出再支払備金控除前)	153,243	百万円
同上に係る出再支払備金	8,966	百万円
差引	144,276	百万円

- 7 繰延税金資産の総額は2,447百万円であります。なお、評価性引当額として全額を繰延税金資産の総額から控除しております。
繰延税金資産の発生の主な原因別の内訳は、税務上の繰越欠損金2,295百万円、未払事業税81百万円、退職給付引当金36百万円、未払特別法人事業税22百万円であります。
評価性引当額に重要な変動が生じている主な要因は、税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額が1,738百万円増加したことによります。
- 8 当事業年度末日後、翌事業年度以降の財産又は損益に重要な影響を及ぼす事象は生じておりません。
- 9 1株当たりの純資産額は769円30銭であります。
算定上の基礎である純資産の部の合計は1,529百万円、普通株式に係る純資産額は1,529百万円、普通株式の当期末株式数は1,988千株であります。
- 10 金額は記載単位未満を切り捨てて表示しております。

損益計算書

(2021年4月 1日から
2022年3月31日まで)

(単位:百万円)

科 目	金 額
経 常 収 益	254,971
保 険 引 受 収 益	252,930
正味収入保険料	252,468
積立保険料等運用益	462
資 産 運 用 収 益	2,040
利息及び配当金収入	594
有価証券売却益	144
為替差益	1,763
その他運用収益	0
積立保険料等運用益振替	△ 462
経 常 費 用	254,970
保 険 引 受 費 用	251,456
正味支払保険金	150,088
損害調査費	13,270
諸手数料及び集金費	55,111
支払備金繰入額	25,695
責任準備金繰入額	7,291
資 産 運 用 費 用	1,662
有価証券売却損	207
金融派生商品費用	1,439
その他運用費用	15
営 業 費 及 び 一 般 管 理 費	1,828
そ の 他 経 常 費 用	22
支払利息	22
経 常 利 益	1
特 別 利 益	2
その他特別利益	2
特 別 損 失	2
価格変動準備金繰入額	0
その他特別損失	2
税 引 前 当 期 純 利 益	1
法 人 税 及 び 住 民 税	0
法 人 税 等 合 計	0
当 期 純 利 益	1

(注)

- 1 正味収入保険料の内訳は次のとおりであります。

収入保険料	329,088	百万円
支払再保険料	76,619	百万円
差引	252,468	百万円

- 2 正味支払保険金の内訳は次のとおりであります。

支払保険金	290,335	百万円
回収再保険金	140,247	百万円
差引	150,088	百万円

- 3 支払備金繰入額(△は支払備金戻入額)の内訳は次のとおりであります。

支払備金繰入額(出再支払備金控除前)	△9,077	百万円
同上に係る出再支払備金繰入額	△34,773	百万円
差引	25,695	百万円

- 4 利息及び配当金収入の内訳は次のとおりであります。

預貯金利息	8	百万円
コールローン利息	0	百万円
買入金銭債権利息	2	百万円
有価証券利息	584	百万円
計	594	百万円

- 5 金融派生商品費用中の評価損益は1,346百万円の損であります。

- 6 1株当たりの当期純利益は0円75銭であります。

算定上の基礎である当期純利益は1百万円、普通株式に係る当期純利益は1百万円、普通株式の期中平均株式数は1,988千株であります。

- 7 当期末における法定実効税率は28.00%、税効果会計適用後の法人税等の負担率は16.24%であり、この差異の主な内訳は、評価性引当額の増減額95,587.74%、保険金等に係る危険準備金有税戻入額の益金不算入額△89,504.57%及び広告宣伝費用に係る危険準備金有税戻入額の益金不算入額△6,116.54%であります。

- 8 金額は記載単位未満を切り捨てて表示しております。

株主資本等変動計算書

〔 2021年4月 1日から
2022年3月31日まで 〕

(単位:百万円)

	株主資本							評価・換算 差額等		純資産 合計	
	資本金	利益剰余金					自己 株式	株主資本 合計	その 他有 価証 券評 価差 額金		評価 ・換 算差 額等 合計
		利益 準備 金	特別積 立金	価格変 動特別 積立金	繰越利 益剰余 金	利益剰 余金合 計					
当期首残高	1,000	1	17	39	488	546	△5	1,540	△1	△1	1,538
当期変動額											
当期純利益					1	1		1			1
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)									△10	△10	△10
当期変動額合計					1	1		1	△10	△10	△8
当期末残高	1,000	1	17	39	489	547	△5	1,541	△12	△12	1,529

(注) 1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位:株)

	前事業年度末 株式数	当事業年度 増加株式数	当事業年度 減少株式数	当事業年度末 株式数
発行済株式				
普通株式	2,000,000	-	-	2,000,000
合計	2,000,000	-	-	2,000,000
自己株式				
普通株式	11,400	-	-	11,400
合計	11,400	-	-	11,400

2 金額は記載単位未満を切り捨てて表示しております。

会社の概要 (2022年3月31日現在)

設立	1966年5月30日
営業種目	地震再保険
資本金	10億円
総資産	6,890億円
正味収入保険料	2,524億円
本店所在地	〒103-0024 東京都中央区日本橋小舟町8番1 ヒューリック小舟町ビル4階

役員 (2022年6月30日現在)

取締役会長	石原一彦
取締役社長	伊東正仁
常務取締役	池田基己
常務取締役	羽田宏之
取締役	広瀬伸一
取締役	白川儀一
取締役	船曳真一郎
取締役	新納啓介
常勤監査役	鈴木毅
監査役	松永祐明
監査役	織山晋

本報告書に関するお問合せ先

日本地震再保険株式会社

〒103-0024 東京都中央区日本橋小舟町8番1

ヒューリック小舟町ビル4階

管理・企画部

TEL 03-3664-6098

FAX 03-3664-6169

E-mail : keiri@nihonjishin.co.jp

ホームページ : <https://www.nihonjishin.co.jp/>